

地域を知ろう(29)

民話・伝説

No.8 一里塚

さんしの森にあった 一里塚

江戸時代、杉並区内には一里塚が三か所設けられていました。甲州街道の高井戸、青梅街道では、さんしの森公園付近、それと荻窪の四面道交差点の付近でした。

一里塚とは、日本橋を起点として五街道と呼ばれる官道に一里ごとに塚を設け、その上に榎を植えた里程標です。

青梅街道は官道ではなく、江戸城への運搬道路として整備されたので、のちに江戸府内への物資を運ぶ産業道路という性格になりました。

さんしの森公園正面の東側のところに椎の大きな木が、びえていますが、このあたりが一里塚の跡ではなからうかといわれています。ここは日本橋から三里、内藤新宿からは一里と、この距離にあたる

青梅街道は、新宿で甲州街道から分かれていますが、日本橋から数えた距離かもしれませんが、このことは、文政年間に「武蔵名勝図会」という八王子千人同心出身の植田孟晉と、いう人がその本の中で書いています。それによると、文政年間すでにこの一里塚は崩され、植えられた榎も朽ちてしまっていたとあります。

さんしの森と四面道の間には、半里塚といわれる処があり（杉並区役所の辺）、ここにはつい戦前まで、目じるしの「さいかち」の木が立っていました。

現在、都内には一里塚が北区滝野川と志村に大切に保存されています。このように、近しい森公園の付近には、江戸時代の交通上の遺跡があるのですが、あまり人々には知られていません。知られていないと想像してみ

てはいかがでしたか。

